

地域の方々と共に考える認知症のケアマネジメント

氏名：山田登喜子・NPO ゆうらいふケアマネジャー10名

所属：特定非営利活動法人（NPO）ゆうらいふ

滋賀県守山市立田町 1231-4

<要旨>

平成19年度、独立行政法人福祉医療機構の助成を受け“認知症の方々から学ぶ暮らし方・生き方探し事業”の研究を実施しました。委員を自治会長・民生委員・認知症家族の会の方に依頼しました。当初“認知症”という重いテーマを投げかけて研究活動に参画して頂けるかと危惧しましたが、実際には委員の方々の積極的な参画と多大なる知恵の結集で、地域に密着した実践的な研究ができました。認知症を“明日はわが身”と捉え、“地域を我が家の延長に！”と地域づくりの原点まで検証できたことは大きな収穫でした。その研究事業の一端を発表します。

I：研究目的

在宅介護ケアマネジメントを実践する中で、医療・福祉制度や司法サービスには目を向けていましたが、地域力の活用は倦厭しがちでした。今回の研究は、生活の根っこである“地域の底力”“本人の生活力”を活用したケアマネジメントの実践を目的としました。

II：研究内容

1. 認知症の当事者から学ぶケアマネジメント

認知症になった一人暮らしの女性の切実な声“私はどこにも行きたくない。ここ（我が家）に居たい”を具現化するケアマネジメントとは？

2. 地域の人々の“認知症”への理解の変化

当初地域からの「認知症の人が一人でいると迷惑である、早く施設に入れて・・・」との声に奔走。地域との話合いの結果「明日はわが身、地域での暮らしを支えよう・・・」へ。なぜ変わったか？

3. ケアマネジャーの気づき！地域の底力！

<人はみんな逞しく暮している！>

①我が家で“死”を迎えたい！この願いを具現化する為のケアマネジメントの再確認

②本人の生活力の再発見

認知症（要介護2）になっても、“自身の思い”を訴え得る逞しさからの学び

・ 住いと資金力

・ 本人の友人・知人力；馴染みの関係

III：研究結果

研究を重ねるごとに当事者・ご近所の底力を再発見することができました。田舎暮らしは損だと思っていたのに、実は社会資源の宝庫であることを共に確認できました。認知症を“明日はわが身”と捉え“認知症になっても安心して暮し続け、命の終わりを我が家で迎えられる地域づくりを目指して、共に力をあわせて築いていく為の地域交流部を創設する原動力となりました。

IV：考察および結論

介護保険のケアマネジメントは、介護サービスを柱にインフォーマルサービスを加えてプランを組み立ててきましたが、本来の生活の継続支援プランは、本人の生活力・家族の介護力を柱に地域力を活用し、必要時介護サービスを利用することが重要であると改めて気づかされました。

誰もが人の世話は受けたくないと思い、自力で暮そうとしています。それでも“老い”や“死”は平等に訪れ介護を必要とする時がきます。その時を適切にケアマネジメントできるように地域のネットワークを構築していくことがケアマネジャーに課せられた大きな役割であると再認識しました。